

『紅雪録』における泉鏡花の地方観

Kyoka Izumi's Outlook of the Local Society in "Deep Red Snow Record"

岡田 洋司 Youji OKADA

概 要

近代日本の知識人は、おもに東京という場で知的活動を行っていた。それは近代日本において一貫して地方社会を疎外してきた中央集権体制にもたれかかるものであり、“地方”という問題をどのようにとらえるかということは、近代日本の知識人の“質”にかかわる問題であった。

本稿では、明治 30 年代の名古屋という地方都市を舞台とした泉鏡花「紅雪録」を例に鏡花がどのように地方社会を認識し、その地方社会観が、彼の小説にどのような影響をあたえているのかを検討した。この小説では、鏡花は東京出身者を登場人物にただだけでなく、登場人物には名古屋方言を使わせなかった。また名古屋全体を雪で覆い現実のこの地域をほとんど描いていない。その意味では、「紅雪録」には、鏡花の脱地域性・脱地方性ともいうべき姿勢が見える。しかし、かならずしも自覚的とはいえないが、鏡花が批判的に見ていたのは近代化されつつある名古屋のあり方であり、近世からもちこされた名古屋の地域性・地方性に対しては無理解ではなかった。

キーワード

泉鏡花	Kyoka Izumi
地方観	Outlook on Local Society
「紅雪録」	"KOUSSETSUROKU" ("Deep Red Snow Record")
「名古屋見物」	"Traveler's Journal of NAGOYA"
名古屋	NAGOYA

目 次

はじめに

I 「名古屋見物」をめぐって

1. 名古屋の全体像への無関心
2. 参照系としての東京

II 「紅雪録」における脱地域性

1. “東京”を軸足とする登場人物たち
2. 雪で覆われる名古屋

おわりに

はじめに

泉鏡花の作品全集・作品集は、大正末以来、何度も刊行されている*¹。その最新版は、2003～04 年に岩波書店から刊行された『新編泉鏡花集』（全 10 巻、および別巻 2 冊）である。この作品集の特徴は、各巻が作品が舞台とする都市・地域ごとに編集され

ていることである。それは、鏡花の、東京に住みながら全国のさまざまな地域を舞台に作品を書いているという特質により可能になった編集のあり方である。

近代日本の文学者、あるいはより一般化すれば近代日本の知識人が“地方”をどのように見てきたか

という問題は大きな意味をもっている。知識人自体、中央集権体制というヒエラルキーの頂点にある中央＝東京（帝都）という場で知的活動を行っていた。そのことは、ある意味では知識人が中央集権性にもたれかかるという特権的立場にあったことを示すものである。したがって、その問題をどの程度、どのように自覚するかは、近代日本の知識人の“質”にかかわる問題であったはずである*²。

たとえば夏目漱石の場合である。漱石は、帝国として“発展”しつつける近代日本をトータルにとらえ、その発展の方向に対して疑義を唱えた（「現代の開化」等）。反面、漱石には抜きがたい地方社会への偏見があり、その両者の乖離が漱石の思想の大きな問題であった。とはいえ、漱石は、松山や熊本の地方生活のなかで、地方社会を単に嫌悪・侮蔑の対象としたのではなく、「いわば知的非エリート層」*³を発見し、それは、「かれの後年の著作における洋服細民（ホワイト・カラー）の原型になる」*⁴と、かつて鹿野政直は指摘していたように“地方”をまったく切り捨てたわけでもなかった。このように知識人と地方という問題は微妙ではあったが、近代日本の知識人にとって“地方”という問題は、彼らがそれを意識するかしないかは別として、じつは彼ら自身の存在意義にかかわる大きな問題であったということではできよう。

本稿は、泉鏡花の名古屋を舞台とする「紅雪録」「紅雪録（続）」（『新小説』第9年第3巻・第4巻、1904〈明治37〉年3月1日・4月1日、春陽堂、以下この両者をまとめて「紅雪録」と呼ぶ）を分析することによって、近代文学者の地方観という問題にアプローチする一つの材料を提供するものである。

鏡花を対象としたのは、前述のように彼が地方を舞台にした作品を多く書いているからであり、「紅雪録」を選んだのは、この作品の前提として「名古屋見物」という文章があり、この文章と「紅雪録」をセットにして検討することによって鏡花の地方観がかなり明確に示されているからである。

この作品については、助川徳是等の研究*⁵があり、この作品の成立状況や舞台となっている名古屋の場所・建物などについて詳細にあきらかにされている。本稿は、助川の研究に導かれながら、鏡花の名古屋観＝地方観がどのようなものであり、その名古屋観＝地方観がこの作品のあり方にどのように反映されているかを考察する。

註

*1 泉鏡花の全集・選集には次のようなものがある。『鏡花全集』全15巻（春陽堂、1925～27年）、『鏡花全集』全28巻（岩波書店、1940～42年、なおこの岩波版全集は、別巻1冊を加えて、1973～76年と1986～89年に第2次・第3次刊行された）、『鏡花全集』全15巻（エム・ティ出版、1994年、春陽堂版の複製）、『鏡花小説・戯曲集』全12巻（岩波書店、1981～82年）、『新編泉鏡花集』全10巻および別巻2冊（岩波書店、2003～06年）。そのほか『明治文学全集』（筑摩書房）、『新日本古典文学大系 明治篇』（岩波書店）をはじめとするさまざまな文学全集には、鏡花の巻がおかれていることはいうまでもあるまい。なお、本稿ではテキストとしては、最新のヴァージョンである『新編泉鏡花集』を、必要な限りで初出やほかのテキストを参照しつつ用いる。

*2 近代文学研究においては、地方社会でどのようなかたちで文学が形成され、発展していったのかという視点からの研究は、数多い。しかし、中央の文学者がどのように地方を認識していたかを本格的に検討した研究はきわめて少ないように思われる。

*3・4 鹿野「夏目漱石と明治国家」（『近代精神の道程—ナショナリズムをめぐる—』花神社、1977年、『鹿野政直思想史論集』第6巻〈岩波書店、2008年〉に再録）165頁。なお、このテーマについては本格的に先行研究の整理をしなければならないが、ここではこれ以上展開しない。他日に期したい。

*5 「紅雪録」については、各全集の「解説」「解題」等で論じられているが、独立した研究としては、阿部堅磐「「紅雪録」と泉鏡花」（名古屋近代文学史研究会『名古屋明治文学史（二）—中期の文学とその展開—』名古屋市教育委員会文化財叢書第76号、1979年）、助川「「紅雪録」「続紅雪録」考」（『文学』第51巻第6号、1983年6月）、助川「鏡花の名古屋—「紅雪録」「続紅雪録」の世界—」（『愛知県史研究』第7号、2003年3月）等がある。鏡花また鏡花文学については、村松定孝『泉鏡花研究』（冬樹社、1974年）をはじめとして、かなり多くの先行研究があるが、ここでは立ち入らない。

I 「名古屋見物」をめぐる

1. 名古屋の全体像への無関心

泉鏡花の作品でいえば、「高野聖」（1900年）の冒頭で、名古屋は次のように扱われている。

尾張の停車場で他の乗組員は言合はせたやうに、不残下りたので、函の中には唯上人と私と二人になつた。この汽車は新橋を昨夜九時半に発つて、今夕敦賀に入らうといふ、名古屋では正午だつた

から、飯に一折の鰯を買った。旅僧も私と同じく其の鰯を求めたのであるが、蓋を開けると、ばら／＼と海苔が懸つた、五目飯の下等なので。（やあ、人参と干瓢ばかりだ、）と疎勿ツしく絶叫した、私の顔を見て旅僧は耐へ兼ねたものと見える、吃々と笑ひ出した〔以下略〕*¹

語り手と旅僧は、東海道線―北陸線の列車で名古屋を通過する（なお、少なくともこの作品の発表された 1900 年という時点では、東海道線から北陸線に直通する列車はない）。またそこで買った鰯（実際は五目飯）は粗末なものであった。名古屋は通過され*²、しかも鏡花は読者に名古屋のマイナス・イメージを投げつける。

それに対して、それから数年後の作品、「紅雪録」（1904 年）では、名古屋は小説の舞台となっており、少なくとも通過点ではない。そこでの名古屋観を具体的に検討する前に、前提として「紅雪録」発表までの鏡花と名古屋との関係を見てみよう。

『新編泉鏡花集』別巻二の「年譜」から鏡花と名古屋とのかかわりの部分をやや自由に抜粋すると次のようになる*³。

1902（明治 35）年

1 月 31 日 「新小説」特派員として、柳川春葉とともに名古屋へ出張する前に、杉野喜精（当時名古屋銀行支配人）宛の添書をもらうために紅葉〔尾崎一引用者〕宅を訪れたが、紅葉は起床直後で用意が整わず、そのまま名古屋に発った。紅葉は後刻杉野宛に添書を郵送した。

2 月 4 日 この日は、和達陽太郎（名古屋市電話交換局長）宅に泊った。

2 月 5 日 名古屋市の文芸同人誌「虹」主催の歓迎会（富沢町花月楼）に出席し、杉野喜精宅に泊った。

2 月 6 日 和達陽太郎夫人瑾の案内で名古屋市内を廻り、大須宮房楼の歓迎会に出席した。

2 月 7 日 伊勢に向かい、伊勢神宮・古市・二見ヶ浦等を廻る。

2 月 10 日 名古屋から帰京。

助川徳是によれば、これ以外にも翌 1903（明治 36）年 1 月の関西旅行の途中、および 04 年 5 月にも立ち寄ったとのことであるが*⁴、鏡花と名古屋との内実をとまなうかかわりは 1902 年の「新小説」特派員としての旅行に限定されることは、間違いあるまい。



図 1 名古屋の市街地と鏡花の訪問先

註：i 『新編泉鏡花集』第 7 巻（岩波書店、2004 年）所収の「名古屋全図」（明治 35 年 10 月）を加工した。
ii 上の右方向の矢印は、近代的な繁華街の発展の方向。下の矢印と番号は鏡花たちが歩いた方向と順番を大ざっぱに示したものである。

その「新小説」特派員としての取材にもとづいて書かれたのが、1902 年 4 月・5 月の『新小説』に掲載された「名古屋見物 附り伊勢まゐり」という紀行文である。特派員は、鏡花と柳川春葉の二人であり、この文章も共筆である。その意味では鏡花の思想を摘出するにはやや不都合な点もあるが、とりあえず、この文章に示された名古屋観について考えていく。

この文章は、たしかに紀行文といえど紀行文であるが、通常の紀行文のかたちはとっていない。この文章には、地の文章がなく、「特派員甲」「特派員乙」のほか「頭取」「車夫」「関東者」「書生」「吹矢の姉さん」「田舎者」「やじうま」等々、鏡花と柳川春葉という二人の特派員、およびその二人が名古屋で出会ったという設定の人物たちの会話を連ねるかたちで書かれている。全体として見れば、諧謔的かつ才気煥発な文章である。

まず、この文章のなかで鏡花と春葉が訪れた場所は、文章自体からはいささか捕捉しにくい、大ざっぱに示すと次のようになる(図1)。

名古屋駅(笹島の停車場)→〔市街電車〕→長者町→〔人力車〕→大須(大須観音)→〔徒歩、以下、徒歩〕→東陽館(前津)→熱田神宮→広見→牡丹亭→大池

また、「名古屋見物」が実際に歩いた順に書かれているとすれば、たとえば、大須観音から前津の東陽館にまわり、そこから熱田神宮に行くというのはかなり遠回りになる。大須と東陽館のあいだをいろいろ散策したということであろうか(あくまで、「名古屋見物」が実際に歩いた順を追って記述してあるとすればである)。

しかし、そもそもこのコースは、外部からの来訪者が名古屋を見るコースとしてはかならずしも一般的ではないコースである。図1で示すように、名古屋の旧城下町は、名古屋城をほぼ北限にして(中心ではなく)、その南に碁盤の目状の街路に仕切られて展開していた。そしてそのほぼ南限に名古屋駅から広小路など東の方向に近代的な繁華街が形成されていた^{*5}。鏡花・春葉は、名古屋城(当時は第三師団がおかれていた)をはじめとする城下町としての名古屋の中心部分、また明治10年代終わりから20年代にかけて整備された繁華街をまったく訪れていない(正確には、記述していない)のである^{*6}。

鏡花らは、1898(明治31)年に開通したばかりの名古屋電気鉄道^{*7}で旧城下町のなかにある長者町(現在は中区錦三丁目。以下カッコ内は現在の地名)に出て、そこから人力車で大須(中区大須)に向かっている。

大須^{*8}は、近世都市におけるいわばアジールとしての大須観音(北野山真福寺宝生院)等の寺社があり、城下町名古屋の周縁として遊郭等も存在していた。また大須自体は庶民的な繁華街であった。

その大須に隣接するのが前津(中区大須・橘等)である。ここは、江戸期には横井也有のような文人も住む一隠棲する一場所であり、近代以降になると、名古屋の富裕層の邸宅・別邸がおかれた^{*9}。

そこから彼らは、熱田神宮にむかう。熱田神宮のある熱田は、名古屋とは別の文化をもつ別の町である^{*10}。すなわち熱田神宮の門前町であり、東海道の宿場町(宮宿)としての近世都市である。鏡花が

ここを訪れた時点では、愛知郡熱田町であった(1908年に名古屋市に合併。現在は名古屋市熱田区)。そして、鏡花たちは、広見^{*11}・大池(中区千代田)を経て名古屋駅方面へ帰って行く。

前述のように、鏡花は1月31日に東京を発っている。そして2月6日に旧知の和達瑾(名古屋市電話交換局長和達陽太郎の夫人。鏡花の師尾崎紅葉のいわば崇拜者)の案内で大須等を訪れているのであり、「名古屋見物」には、そのとき訪れたときのことが書かれているといえよう。しかし、名古屋に着いてからそれまでは数日ある。また2月5日には、富沢町花月楼で歓迎会がひらかれている。富沢町は現在中区錦三丁目にあたり、前述の名古屋駅から東にむかう繁華街の一角にある。ということは、おそらく鏡花たちは、名古屋城をはじめとする城下町としての名古屋の中心部分、また明治になってから整備された繁華街をまったく見ていないわけではないと考えられる。そして、2月6日の市内散策はそれを前提としてのことと思われる。

しかし、いずれにせよ、「名古屋見物」における鏡花・春葉の態度は、『新小説』の「特派員」として、名古屋全体をまんべんなく見渡し、それを過不足なく紹介するという態度ではなかったように見える。飛躍を承知でいえば、その姿勢からは、名古屋への積極的な興味・関心はうかがいにくい。まずそのことを指摘しておきたい。

2. 参照系としての東京

前述の長者町—大須—前津—熱田という鏡花らの訪れた場所についての登場人物の会話には、鏡花・春葉の名古屋観＝地方観が表現されている。たとえば冒頭に腕車＝人力車が登場するが、その人力車に対して「関東者」は、次のように文句をつける(もちろん、この関東者は架空の人物である)。

(関東者)一寸待つて下さい、何とも早若い衆〔人力車夫—引用者〕には済まない事だが、そも—当地の腕車といふものは、一駄に丈が低くて、両方の泥よけの処に金属の欄干が附いてゐる。加之背中の当る処に友禅メレンスの長方形の布団が縫附けてある是で駆出すと車の輪がガラ—鳴る処は何うしても俺が国の乳母車で、甚だ威勢が無い事だ^{*12}。

「関東者」は、名古屋の人力車に対して、「俺が国の乳母車」と悪口を言い立てる。それに対して地元の「老実家」は、「あの欄干がついて居ませんと、

蹴込みに上がります時にたよりがございません」*¹³と反論する。しかしふたたび「中腹」が反論し、「彼の車で大須の観音様へでも練込んで見ねえ、鳩ツボツボが行列を造くつて附いて来らあ」*¹⁴とべらんめい調で啖呵を切る。それだけではない。「車夫」が名古屋方言*¹⁵で話すと、「頭取」は、次のように書記に名古屋方言で筆記させないようにする。

（頭取）書記さん一寸、土地ツ児がお話の時もお言はつひ通りになすつて下さい、ぢやいもなどを其のまんまでは大にお心持にさはる方があると悪うございます。（書記）それでは乗り得ない口だろうよとなほします*¹⁶

ところが、これには、そのつづきがあつて、「関東者」が、「だがね、俺らがべらんめいと罷出る時は其のまんまに願えてもんだ」*¹⁷と主張して、関東＝東京の立場が露わにされる。つまり、この文章においては、鏡花＝春葉は、名古屋において違和感にぶつかるとに、つねに東京を参照しているということである。そして、東京というコンテクストに読み替えられる。大須は「小浅草」*¹⁸と、広見は、「名古屋の郊外で、一寸目黒といふやうな処」*¹⁹と読み替えられるのである。

またその参照系としての東京は、基本的に名古屋に優越している。「小浅草」という言い方がすでにそれを表しているが、そこにある水族館についても、「是も東京等の水族館流行に感じまして、急拵へに形ばかり出来てましたのですから、何分百事不整頓」*²⁰とされる。前津の美術品陳列場の絵画に対しては、「（悪口）おいらは前津の小学校の生徒の制作品かと思つた」*²¹と毒づく。つまり、東京を自分たちの拠って立つ基盤として意識し、それを参照するにとどまらず、東京を優越的な基準として名古屋＝地方社会を裁断しようとしているのである。したがって、名古屋の文物に対し、その独自性・価値を見いだそうという姿勢には乏しいし、東京＝中央を相対化する視点を欠いている。大須名物の「外郎」は、「少し朦朧^{さなだむし}躰ぢや」*²²と揶揄され、「きしめん」は、「其状頗る条虫に似たり」*²³とこき下ろされる。そもそもそれ以前に、「一躰上方は何れに参つても酒に不足はありませんが、取分河文〔名古屋の料亭—引用者〕は珍重です」*²⁴というように名古屋を上方とみなすといういささか荒っぽい地方社会観がある。

三重県桑名を舞台とした「歌行燈」（1910年）のなかに次のような一節がある。

上方筋は何でもない、間違つて謡を聞いても、お百姓が、（風呂が沸いた）で竹法螺吹くも同然だが、東へ上つて、箱根の山のどてつばらに手が掛ると、もう、な、江戸の鼓が響くから、どう我慢が成るものか！ うつかり謡をうたいそうで危くつて成らないからね、今切は越せません*²⁵。

ここに示されているのは、「箱根」を境に世界を分ける思考である。この「歌行燈」の一節は、かならずしも鏡花自身の世界観の表現ではないかもしれないが、「名古屋見物」に示された意識は、こうした世界観と共通するものである。その意味で箱根以西は、箱根以西として大ざっぱなかたちでとらえられ、上方の範囲も厳密には考えられない。また、それは、おそらくは、「野暮と化け物は箱根から先」という価値観をとまなっていることも否定できないだろう。

以上のような見方が、「名古屋見物」に示される基本的な認識である。たしかに、この文章は鏡花・春葉の共作であるが、両者が合意の上で発表された以上は、この文章に示される姿勢を鏡花のものとしても、さほど不都合ではないと思われる。

そうした認識においては、名古屋の繁華街は、スケールの小さな東京の後追いに見えたことは想像に難くなく、鏡花は名古屋駅から東の方向に形成された繁華街に目もくれなかったという解釈も成立するのではなかろうか*²⁶。

註

*1 鏡花「高野聖」（『新編泉鏡花集』第8巻、岩波書店、2004年）3～4頁。

*2 あるいは、鏡花「柏奇譚」（1916年）には次のような一節がある。「往路の三人づれが、一人は、塩尻から中央線に乗り換へて、此れは名古屋から伊勢路に掛る〔以下略〕」（前掲『新編泉鏡花集』第8巻、213頁）。中央線が「名古屋から伊勢路に掛る」というのは、いささか妙な表現ではあるが、1916（大正5）年という時点においても鏡花にとっては名古屋は伊勢に行く通過点に過ぎないことを示すものであろうか。鏡花の関心は伊勢の方にあるようである。

*3 「年譜」（『新編泉鏡花集』別巻二、岩波書店、2006年）44頁。

*4 前掲助川「『紅雪録』『続紅雪録』考」85頁。

*5 名古屋の市街地形成については、編集委員会『新修名古屋市史』第5巻（名古屋市、2000年）に一応の記述はあるが、中区制施行百周年記念事業実行委員会『名古屋市中区誌』（同実行委員会、2010年）がより詳しい。

*6 たとえば、『文芸倶楽部 定期増刊 名古屋と伊勢』（博

文館、1902年)という雑誌がある。この雑誌は、観光案内ではないが、大須・前津・熱田以外に名古屋城・広小路・戦捷記念碑といった地名が散見され、鏡花の「名古屋見物」とはやや異なる面も見せる。

- *7 名古屋電気鉄道については名古屋鉄道広報宣伝部編纂『名古屋鉄道百年史』(名古屋鉄道、1994年)に詳しい。
- *8 大須については、編集委員会『新修名古屋市史』各巻、前掲『名古屋市中区誌』のほか大野一英『大須物語』(中日新聞本社、1979年)、沢井鈴一『名古屋大須物語』(堀川文化探検隊、2010年)などがある。
- *9 山田秋衛『前津旧事誌』(曾保津之舎、1936年)。
- *10 熱田の歴史については、『新編名古屋市史』各巻のほか、区制五十周年記念誌編集部『名古屋市熱田区誌』(同記念事業実行委員会、1987年)、三渡俊一郎『熱田区の歴史 名古屋区史シリーズ』(愛知県郷土資料刊行会、2006年)等がある。
- *11 広見は、助川徳是によれば、現在の昭和区広見町ではなく、中区の東本願寺名古屋別院の「東の小区域の通称」(前掲助川「紅雪録」「続紅雪録」考」91頁)とのことである。中区橋二丁目にあたる。
- *12~14 「名古屋見物 附り伊勢まゐり」(『新編泉鏡花集』別巻一、岩波書店、2005年) 158頁。
- *15 本稿では、さまざまな問題があることを知りつつも「方言」という言葉を使う。
- *16・17 前掲「名古屋見物 附り伊勢まゐり」158頁。
- *18 同前 160頁。
- *19 同前 175頁。
- *20 同前 160頁。
- *21 同前 162頁。
- *22 同前 163頁。
- *23 同前 173頁。
- *24 同前 164頁。1891(明治24)年10月28日の濃尾地震を報じる、東京のある新聞記事は、次のようにいう。「一昨朝の地震は東京に^マて左程に感ぜざりしが関西地方は岐阜愛知地方を中心として非常の強震にて〔以下略〕」(『中央新聞号外』1891年10月29日)。この記事では岐阜も愛知も関西地方なのであり、鏡花の感覚は決して特異ではない。
- *25 鏡花「歌行燈」(『新編泉鏡花集』第7巻、岩波書店、2004年) 359頁。
- *26 当時の名古屋は、濃尾地震の被害から完全に立ち直っていなかったことも理由として考えることはできよう。

II 「紅雪録」における脱地域性

1. “東京”を軸足とする登場人物たち

泉鏡花は、1902(明治35)年2月の名古屋での

取材・見聞をもとに、前述のように『新小説』第9年第3巻(1904年3月1日、春陽堂)に「紅雪録」を、第4巻(4月1日)に「紅雪録(続)」を連続して掲載した。両者合わせて、400字詰め原稿用紙で300枚を切る中編小説である。

この小説は、名古屋を舞台としたものである。しかし、この小説には名古屋の地域性はほとんどあらわれない。それは、前述の「名古屋見物」における鏡花の名古屋観に密接にかかわるものであるが、まず登場人物である。

この小説の主人公は深見千之助という。千之助は、東京の役所勤めの若い紳士である。彼は一年前に姉が住んでいる名古屋で酒を飲んだうでで焚火にあたり、大火傷をした。そのため姉によって禁酒を誓わされた。この禁酒を破ったことを姉に了解してもらうために正月の休みを利用して名古屋に来ているという設定である。

その姉は、名前は明記されていない。高等官である夫の赴任のため名古屋に居住しているとされる。「東京で有名な学校出のばり―だ、縦の字も読めれば横の字もすら―読む、馬や自転車は知らないが、ぶらんこにも乗つたらう、荒き風処ぢやない、テニスの珠にまで当つた」*¹という女性である。東京の女学校を卒業し、近代的教養も身につけている育ちの良い女性である。次のように描写される。

唯見ると古代紫の頭巾を深く、紫紺縮緬の肩掛は無造作に引かけて、鉄御納戸無地のお召縮緬の薄手なコオト、絹手袋の紺淡く、細りと指の長いのが、手提の旅行鞆に繻珍の信玄袋を持添へた、丈だちすらりと、然ればそこ風には堪へじ柳腰、梅の薫を膚に籠めて、艶に品善き夫人である*²。

後半はかなり類型的な描写である。しかし前半の彼女の衣装はきわめて具体的な描写である。これは、村松定孝によれば、前述の和達瑾の衣装を写したものであるという*³。

瑾は、尾崎紅葉の崇拜者であった。鏡花は、その紅葉の高弟であり、その限りで、瑾は鏡花に対して好意的な態度をとった。しかし、それはあくまで紅葉の弟子であることが前提なのであり、鏡花に対して度を越した好意を持っていたわけではない。そのため紅葉没後は、鏡花に対して距離をおいた―鏡花から見れば冷淡な―対応をした。須田千里は、成瀬正勝らの見解を受け継いで、「瑾に対する愛憎二面が綾子と姉に分身的に現れたと考えられる」*⁴としている。そして、「姉」にはこの愛憎二面のうち“愛”の

側面が表されている。

ところでこの二人には両親はなく、姉弟も千之助だけである。そのためもあってか千之助への対応は、姉の弟に対する対応としてはやや違和感をもたざるを得ない部分もある。名古屋駅で再会し、千之助が東京へ帰ることを知ったときの姉の対応は次のようなものである。

〔姉が千之助に一引用者〕追ひ縋つたと見るといきなり千之助の肩に手をかけた、思ひが籠つて、手が発奮んで、緊乎頸を搔抱き、「帰さない、帰さない、帰さない、帰さない。」*5

この全体としての態度、また「帰さない、帰さない、帰さない、帰さない。」という物言いは、ややコケットリーが感じられ、弟へというより恋人に対する態度であるように感じられなくもない*6。それは、鏡花の和達瑾への未練・願望を示すものであるかもしれない。

いずれにしても、千之助とその姉はもともと名古屋の出身ではない。姉は夫の名古屋への赴任によってたまたま名古屋に在住しているにすぎない。また千之助は、その姉を正月休みに訪ねたにすぎない。いずれも本質的に名古屋という場＝共同体で生きている人間ではない。

もう一人の女性の登場人物であり、鏡花の愛憎二面のうち“憎”を表現しているのが、綾子である。

綾子も姓は不明である。名古屋の「大したお役人様の夫人」*7で、西洋室のある名古屋唯一の別荘に正月を過ごしている。綾子については、次のように描かれる。

年紀は二十三四〔中略〕生際の濃い、あまるほど沢山な髪を花月巻で、冴々しく燦々する宝玉を飾つた横櫛、乙女椿の花簪、目の涼しい、二重瞼の、頬のふツくりした、色の白い、口元の締つた少し濃過ぎると思ふ程に眉のくツきりした、背も些高過ぎるばかりだから、猶見栄えがある、肉が厚いといった柄で、立増つた品格があるではないが、何となく総体に重みのある、其が然も媚めいた形容だつたそうだ*8。

千之助は他人の体験として語っているので伝聞のかたちになっているが、これが綾子についての描写である。「立増つた品格があるではないが、何となく総体に重みのある、其が然も媚めいた形容」というのが、綾子に対する描写の基本的な部分である。千之助の姉が、「艶に品好夫人」として描かれているのに対し、直接的に“性”を感じさせるかたちで描か

れている。

綾子は下駄の鼻緒を切った千之助を、鼻緒を直すという口実で強引に家に上げる。しかも最初は、千之助を誘惑するような態度に出る。

すると別嬪は、身体を投げ出したやうに、上靴の裏を見せて、男の方へ、白い足袋を揃へ反らしながら、寐台に深く手を支えて、長く伸ばした膝の上で、半帕を輪にしたり、はらり解いたり、

（殿方にこそですわ、何の女に、名誉も身分もありませう。お泊り遊ばして下さいますりや、却つて私の名誉ですわ〔以下略〕*9

しかし、結局はこの女性は、千之助に対して何のもてなしもせず、その気持ちをもて遊ぶ。あまつさえ、この女性には子供があり、その子供は千之助に対して傍若無人の態度をとる。そして、大きな屈辱を感じた千之助はそのまま綾子の家を出て、名古屋駅にむかう（そもそも鼻緒を直すという口実で家に上げたのにかかわらず鼻緒は切れたままだった）。

たとえば、「高野聖」では、奥飛騨の山家の女性が若い旅僧を誘う。その女性＝医者「の嬢様」は、若い男を牛や馬に変えるという魔力をもち、魔性のものが夜中に出現し、幻想的な情景を繰り広げる。「紅雪録」の綾子はそうした直接的な魔力・魔法をもたない。しかし、基本的には、「高野聖」の嬢様と同じ類型の女性である。綾子の子供が傍若無人にふるまうさまは、飛騨の山中で魔性のものが乱舞するのを想起させる。

千之助と名古屋駅で酒を酌み交わす「赤帽」は、この綾子の素性を暴露する。

こりやね、前に兄貴の嬢々だつたでさ。兄貴は、商人の癖に、本人望みといふで、此の阿魔久い間、東京へやつて、豪い学者に仕立てたですよ。馬鹿野郎、蝦茶を緋の袴ほどに有難がつたで、自分一つ学校を立てるなんのといふ口に乗つて、恐しく金子を注ぎ込んだもんで。何、皆浮気に使つたのは私が知つてまさ、其のね、私さへ、一寸口説いたくらみな奴だ*10。

赤帽によるとこの兄は、名古屋の塩問屋の跡取りであった。綾はその妻であったが、東京の女学校で学問を修めた。名古屋に帰ってからは、夫には学校をつくるといって資金を出させたものの、この人物によれば、「皆浮気に使つた」という。そして夫を裏切り、前述のように「大したお役人様の夫人」におさまっているという設定である。そして、鏡花は、和達瑾のもう一つの分身ともいえるこの綾子には、

赤帽に「淫婦！」という直截的な言葉を投げさせ^{*1}
1、悪意の限りをぶつける。

綾子に侮辱された千之助もちろん負の感情をもっている。

「無礼な奴だ、君〔赤帽―引用者〕なら殺すか。」

「殺、殺ませいでか。」

「むゝ、まあ、飲め。私なら私も殺す。」^{*12}

この負の感情は、赤帽によって拡大され、千之助の言葉のなかにあった殺意は、赤帽によって実行に移されることになる。

袖を払ふ隙も惜や、其まゝ絨毯の上によろけ込むと、裾、袂を、ばら／＼と落つる雪の、乱るゝや、散るや否や、颯と紅に染まつたのは、敷物の色の映るのではない、床に流れる血汐である^{*13}。

この最後のシーンは、小説が「紅雪録」である所以を示している。また、こうしてみると、姉―綾子が和達瑾の分身であったように、深見千之助―赤帽も鏡花の分身として造形されたものと考えることができるかもしれない。

問題が拡散したのでもとにもどすと、綾子は、生まれは名古屋であろうが、一度は東京に出ている。また、言葉も名古屋方言は使わず、地域性はまったく感じられない。

名古屋生まれでありながら、名古屋方言を使わないことは、悪意の限りをつくして綾子について語る登場人物、すなわち「赤帽」も同様である。

赤帽は、名古屋の塩問屋の二男である。しかし、綾子のため兄が精神に異常をきたし、死亡し、両親もそれを苦にして死去し、彼は名古屋駅の赤帽となったという設定である。この人物は4人の人物のなかで唯一、名古屋で完結している人物である。赤帽の語り口は、前に引用した綾子についての語りや、次の引用のようなものとして示される。

お見受け申した処が、千之助様のおつしゃつたお姉様あねえさんのやうでございますな。御両親はなし、思

った方はお亡なさる。千之助様は最惜い方だ。

優しい旦那だ、貴下、可愛がつて世話をしてお上げなさい、慥う云つちや失礼だが、はじめてお見上げ申してから、何だかなくなつた兄貴のやうでありません、唯兄貴は商人の世間見ずの坊ち野郎だ。旦那は学者の先生だが、人情は一ツでさ、わつし私は乱暴をしましたがね、これでなか／＼兄思ひなんですよ、夫人、よく見てお上げなさいまし^{*14}、

前の引用にあった、「でさ」「ですよ」「知つてまさ」、あるいはこの引用にある「ございますな」「お上げな

さい」「お上げなさいまし」といった語尾は名古屋方言にはない。この引用のルビの部分、「おあねえさん」「わつし」といった言葉も同様である^{*15}。この赤帽の言葉は全体的には東京の職人層の言葉のように見える。赤帽と千之助の会話がなされた場所は、東京であつたとしてもまったく違和感がない。

名古屋方言を使わないから名古屋の地域性がその人物像に反映していないというのは論理の飛躍であろう。しかし、方言が地域性の表現であることも間違いない。また一方で国民国家の成立とともに標準語が成立し^{*16}、方言が軽んじられるようになった状況を考えると、鏡花が方言を作中で使わなかったことの意味は、中央―地方という歴史的コンテクストのなかでは決して軽くない。

いずれにせよ、この小説の登場人物たちは、千之助・姉のように本質的に東京人、東京で教育を受けた綾子、そして名古屋の生活者でありながら、おそらくは東京の言葉であろう言葉を駆使する赤帽というように、いずれも東京が軸となっており、鏡花は名古屋を顧慮することなく、この小説の人物たちを造形したといえよう。

2. 雪で覆われる名古屋

以上、この小説の人物の設定においては、名古屋の地域性は現れていないことを見た。しかし、そのことは、この小説の舞台の設定自体にもいえることである。

この小説は意表をつくかたちではじまっている。「雪」で覆われた名古屋駅のシーンからはじまるのである。しかも、雪は冒頭だけでなく、この小説のすべてを覆っている。その雪は、「江州の山の中で列車が埋り」^{*17}、東海道線の列車が数時間遅延させるほどのものであり、「当所でも大雪」^{*18}として描かれている。この大雪は実際にあったことなのであろうか。

この小説の時間的設定は、「おもしろいは旦那方こそ、当地へ新年の御旅行でございますか」^{*19}という名古屋駅の赤帽の言葉や、それに答える主人公深見千之助の「昨日の朝さ」という言葉、さらには主人公が訪ねてきた名古屋の姉が、「暮の三十日から奈良へ旅行をして留主だといひます」^{*20}という言葉等々から、正月早々に設定されていることがわかる。

一般に明治期は現在より寒冷であるが、太平洋側の名古屋では年末年始に雪が降るとは限らない。鏡花が名古屋を訪れた年の1902(明治35)年1月5日

の『新愛知』には次のような記事がある。

偕て明治三十五年の正月も芽出度正月にて候べき、
旧臘より打ち続きたる天気は、新年に入りても雨
なく、風吹かず、四海波穏かに、千門万戸に翻る
旭旗は、洵に泰平、祥瑞と見受けられ申し候*²
1

この記事によれば、この前年年末から正月にかけて雪、ましてこの小説にあるような豪雪が降った形跡はない(なお1月2日から4日は休刊と思われる)。

表1-1 1902年年始の降水状況 [単位:mm]			
	名古屋	岐阜	彦根
1902(明治35)年1月			
1日	—	0	—
2日	—	0	—
3日	0	2	4
4日	—	—	1
5日	0	0	—
表1-2 1904年年始の降水状況 [単位:mm]			
	名古屋	岐阜	彦根
1904(明治37)年1月			
1日	—	2	0
2日	—	2	17
3日	—	3	1
4日	7	3	12
5日	—	2	8

出典:『気象要覧』

数値のうち—は、全く降水量がないもの、0は、0.5mm未満を示す。

また表1-1は、鏡花が名古屋に赴いた1902年の年始の名古屋・岐阜・彦根の降水状況(雪を含む)を中央气象台編纂『気象要覧』によって見たものである。小説では関ヶ原が雪で埋まり主人公が東京へ帰る列車が遅延するという設定なので、『気象要覧』に示されている地名のうち関ヶ原に近い地点として彦根・岐阜をあげた。

少なくとも1902年正月の名古屋、および関係地域については、この小説の設定のような大量の降雪を示す数字はなく、『新愛知』の記述を裏づけている*²²。

ところが、鏡花がこの小説を発表した年の1904(明治37)年の正月には、降雪がある。1月5日の『新愛知』には次のような記事がある。

一昨夜は天澄み渡り寒月の光隈なく照りて新年稀なる夜と思わしめたるに十時を過ぐる頃よりポツ／＼雪振出し昨朝起き出でてみればまさにこれ一面の銀世界に時ならぬ花を咲かしてこゝ七八年来には無き眺めなりし*²³

1904年の1月3日の夜10時過ぎからは雪が降っているのである。この記事のタイトルは、「昨日の大雪」となっている。しかし、表1-2によれば、この日の降水量は7ミリであり、タイトルのような大雪といえるほどのものではなかった。彦根でも12

ミリであり、関ヶ原で列車が埋まるほどの降雪があったかどうかは疑問である。また小説の発表が3月であり、雪を小説の軸にすえ、そこから小説の全体を構想し、執筆する時間的余裕があるとは、考えにくい。そもそも、この時期に鏡花は名古屋を訪れておらず、自身の見聞・体験によって小説の“雪”の状況を描いたものでないことはたしかである。すなわち、『紅雪録』における雪は基本的には、実際の気象をモデルにした事実・実体ではなく、あくまでフィクションであり、鏡花の“作為”によるものであると見るべきではなかろうか。

雪は、小説の設定上、さまざまな方向に作用する。まず幻想性の創出である。実際に小説のなかから幻想的な描写を拾うこともできる。名古屋駅の構内の描写を二つほど例に挙げておく。

又今停車場に着いたさうな、敷石の際にかたまつた下駄の音、コト／＼と響を交へて、町に降り積もること約五寸なるを囁いて、此処に雪の浪の寄すると聞こゆ*²⁴。

然れば硝子の窓越の、停車場前なる広場も、白き海の動くに似て、二層三層の高樓に、ちら／＼と、電燈の沈んだ色の揺ふさへ、暗夜の潮の輝く風情、空恐しく寂莫として、唯声は風、音は雪、ものゝ氣勢は寒さであつた*²⁵。

ただし、駅舎の外よりも、駅の内部の次の描写の方がより幻想的であるかもしれない。

人々は唯まばらに黒く淡き土間の上に、班々として、吹きつくる風にはら／＼と白き激は、岩に碎くる潮に似て、尾張国を押浸した雪の大浪の退いたあと、散々に名残の海松布を撒き散らした趣あり、彼処にも又小さな暖炉を取巻いて、二重三重に輪を造つたが、滞の縄の断れたる如く、横倒れになつたるあり、横伏しになつたるあり、俯臥しになつたるあり、つんのめつたかと思ふあり、行倒れの如きもあり、赤毛布に莫蔭を交へ、風呂敷に頭巾を並べて、夜気沈々、地の底に、あらゆる構内の光明を引き込む時、壁の色灰に似て朦朧として見えたるありさま、荒海なる難波船の、釘の残つた一室に、幾百年の昔より、底の藻屑に影を留めて、世を終るまで怨霊の消えざる姿に異ななく、時として遙に薄ら蒼き火の暖炉を透きて見えるのも、此等の執念を慰みて、魔王が船幽霊に与ふといふ、呪の炎かと物凄*²⁶。

また、この雪は、同時に名古屋のディテイルを覆

うものでもあった。先ほどの引用によれば、「停車場前なる広場も、白き海の動くに似て…」というように名古屋駅前の広場も「白き海」に置き換えられる。そこには具体性も地域性も存在しない。そのことは、千之助が姉の家から名古屋駅に行くまでの道筋も同様である。

革靴を提げて、せつかちに牡丹亭を飛出すと、いつかの大池の岸について町はづれまで一町足らず、火傷をして乗せられた時覚えがある、此处で車を、と思つたが間違いで、さあ、無からう。記念碑の処まで出さいすりや電車もある事と、其のまゝ目つぶしを喰ふ雪の中をかまはず、突切つて何町か分らない、方角をつけて急いで来ると、間の悪い時といふものは。何と鼻緒がプツ、リ^{*27}。

「目つぶしを喰ふ雪の中」にある主人公には名古屋の町が見えないし、町の全体像も把握はままならない。完全に抽象的ではないにしても、地域性・具体性がかき消された、雪に覆われた空間が存在するのみである^{*28}。

前章で述べたように鏡花は、名古屋自体に強い関心をもっていたわけではない。名古屋を雪で覆うことは、そこから鏡花世界の特質の一つである幻想性を醸し出すための作法であったとしても、それは、名古屋に対する執着のなさや表裏の関係にあったのではなかろうか。雪でまちを覆えば、名古屋のディテールを書き込む必要がなくなるのである。

また、名古屋に雪を降らせたという作為と、この小説が、名古屋を舞台としながら、かなりの部分が、名古屋駅を舞台としていることも不可分の関係にある。

たしかに主人公千之助は、彼の姉の家から広見の綾子の家にも行っている（それは千之助の回想というかたちをとっているが）。しかし、この小説全体の分量からいえば、名古屋駅で列車を待つシーンが大きな割合を占めている。また、彼の姉の家から綾子の家に行くシーンは、回想として扱われ、名古屋駅のシーンのなかに時系列を異にするかたちで嵌め込まれている。名古屋駅のシーンがこの小説の基本となる時制である。それは、鏡花が作品中で雪を降らせたことの結果である。雪が降れば人物の活動の範囲はいちじるしく制限される。そして、千之助は、雪の降りしきる名古屋駅で遅れた列車を待ちながら、赤帽と延々と酒を酌み交わす（赤帽は勤務中であり、不自然といえど不自然である）。そして、最終的には、千之助が東京に帰るために乗る列車に姉が京都か

ら？乗ってきて、そのため偶然、名古屋駅で姉と対面するというシーンが用意される。こうした小説の設定は、雪を降らせ千之助を名古屋駅に閉じ込めたことによって可能になったのである。

「名古屋見物」に見られたように鏡花は、名古屋にかならずしも積極的な興味を示していない。鏡花にとっては、名古屋は所詮、自分の想い人であった和達瑾が住んでいた場所に過ぎなかった。鏡花のこの小説のモチーフは、瑾に対する愛憎相半ばする感情なのであった。そこで、彼は、名古屋を舞台にしたながらも、その地域性をあまり意識することなく人物を造形し、それを雪の降りしきる舞台に配置したのであったのではなかろうか。

註

*1 前掲「紅雪録」68頁。

*2 同前115頁。

*3 前掲村松『泉鏡花研究』257～58頁。

*4 須田「解説」（前掲『新編泉鏡花集』第7巻）464頁。

成瀬正勝は、和達瑾が千之助の姉のモデルであることを述べ、つづけて「妖女お綾のモデルもまた彼女〔和達瑾一引用者〕のデフォルメの一種と考えられぬこともない」（「解題」、『明治文学全集 第21巻 泉鏡花集』筑摩書房、1966年、403頁）とやや控えめに述べている。

*5 前掲「紅雪録」114頁。

*6 なお、小説の最後に、「夫人が実の姉ではなく、姉妹のやうだつた、千之助の恋人絹子が信友」（17頁）という叙述があり、この姉弟の関係が韜晦されるのは、そのことと関係するのかも知れない。

*7 前掲「紅雪録」81頁。

*8 同前79頁。

*9 同前90頁。

*10 同前123頁。

*11 同前81頁。

*12 同前97頁。

*13 同前121頁。

*14 同前125～26頁。

*15 ここでは、この赤帽の言葉に対応する名古屋方言を示すことはできないが、「おわりに」で、芸者の言葉としてあげたような言葉が名古屋方言である。

*16 この点については、イ・ヨンスク『「国語」という思想 近代日本の言語認識』（岩波書店、1996年）、長志珠絵『近代日本と「国語」ナショナルリズム』（吉川弘文館、1998年）等参照。

*17・18 前掲「紅雪録」44頁。なお、「江州の山の中」と

いう表現であるが、ここにも若干の問題が含まれている。主人公の姉は、彼女が乗ってきた列車が関ヶ原で埋まったといっている。「大変な雪ね。」／「ぢや、何ですか、関ヶ原で」／「はあ、埋つたの。」（同前、115 頁）とすれば、列車が雪に埋まったのは江州＝滋賀県ではなく、濃州＝岐阜県である。関ヶ原は濃州である。そこまで厳密に問題にすべきことではないかもしれないが、前の章で述べた鏡花の地方の事情に対する大ざっぱな把握が現れている例である。

*19 同前 60 頁。

*20 同前 74 頁。この小説では、姉が、千之助の東京に帰るのに乗るはずの列車（その列車が雪のため遅延するのであるが）に乗っていて、名古屋駅で偶然再会するという設定になっている。関西鉄道（のちの日本国有鉄道関西線）は、1898（明治 31）年に名古屋－奈良が結ばれ、大阪の網島・四条畷一名古屋間に直通列車が運行されている。とすれば、姉が行っていたとされる奈良から東海道線で名古屋へ帰着するという設定は（帰りに京都に寄ったという設定も考えられなくもないが）かなり不自然である。千之助が東京に帰るために乗ろうとする列車に姉が乗ってきて、そのため名古屋駅で対面するという効果的な状況を作り上げるためであろう。

*21 一記者「編輯局日誌」（『新愛知』1902 年 1 月 5 日）。

*22 註 23 の記事に、年始の雪について「こゝ七八年来には無き眺めなりし」とあり、1903（明治 36）年も年始には目立った降雪はないと思われる。

*23 「昨日の大雪」（『新愛知』1904 年 1 月 5 日）。

*24 前掲「紅雪録」42～43 頁。なお、当時（1895 年）の名古屋駅周辺の状況については、編纂委員会『名古屋駅八十年史』（名古屋駅、1967 年）等に図がある。

*25 前掲「紅雪録」54 頁。

*26 同前 54～55 頁。

*27 同前 77 頁。

*28 小説は、時間的にいえば正月の松の内のこととして設定されているが、小説中には正月風景・情緒はまったく描かれていない。

おわりに

明治期の名古屋が描かれている文学作品は、「紅雪録」のほかには、周知のように夏目漱石「三四郎」（1908 年）がある。また「行人」（1912 年）にも名古屋に触れている箇所がある。いずれも名古屋のあつかいは、決して積極的ではない。「三四郎」については、良く知られているので、「行人」について示すと以下のとおりである。

「二郎、此処は何処だい」

「名古屋です」

自分は吹き込む紗の窓を通して、殆ど人影の差さない停車場の光景を、雨のうちに眺めた。名古屋
 〱と呼ぶ声がまだ遠くの方で聞こえた。夫からこつり〱といふ足音がたつた一人で生きて来るやうに響いた。〔中略〕時計は十二時過ぎであつた。自分は又そつと上の寝台に登つた。寝室は元の通り静かになつた。嫂は母が口を利き出してから、何も云はなくなつた*¹。

主人公たちは名古屋を通過したにすぎず、漱石文学における名古屋は、いわば“通過された都市”でしかなかった。対するに鏡花の「紅雪録」は、名古屋を通過せずに、名古屋を舞台に、一般化すると地方を舞台に物語が紡ぎだされる作品であつた。しかし、本文で述べたようにこの作品においては、名古屋の地域性はほとんど顧慮されておらず、名古屋を舞台にした必然性は見られない。

今まで述べてきたことから導きだすことのできる結論は以上のとおりである。しかし、その点をやや別の角度から見ることもでき、別の評価を下すこともできる。

「名古屋見物」に示される名古屋観は、東京の視点に立つもので、名古屋についての評価はきわめてきびしかったことは前述のとおりである。しかし、じつは鏡花はその視点のみで押し通しているわけではないのである。

たとえば、大須を描いたシーンに「芸妓」が登場して、名古屋方言を次のようにまくしたてる。

（芸妓）名古屋名物、おいて頂戴もにすきやたらんと置きやあせ、ちよつとも、だちかんと、ぐざるぞいも、いゝきやも、さうきやもなんだいも、いきやすか、措きやすが、何うしやす*²

前に述べたように「名古屋見物」では、「土地ツ児がお話の時もお言はつひ通りになすつて下さい」というように名古屋方言は禁じられたはずである。しかし、ここでは芸妓は、名古屋方言を連呼する。その背後にあるのは、「（土地芸者）おいて頂戴も、〔名古屋の芸者は一引用者〕容貌ばかりで売るような土人形ではありません、芸なら、東京大坂何処の姉さんでもおいでなさいですよ。」*³と名古屋の芸者は東京・大阪に一步も引けを取っていないという主張である。鏡花もそれを認め、（土地芸者）に名古屋方言を思い切り使わせているのである。

こうした名古屋の文物に対する好意的な見方は、

芸者のほか料理・料亭（当然、日本料理である）、茶道・華道などの芸事、女性の衣装についても示されている。たとえば、「(ひるき) 他国人は驚くだらう、凡一町内に一構ぐらゐ、茶の湯、活花の宗匠が控えて居ない処はない」*4 というように、名古屋において茶道・華道がきわめて盛んであることが語られる。あるいは、「(感服家) 兎も角、身なりに金のかゝつたのには驚きました、何と、饅頭屋の姐さんが、縞琉球の衣服に、博多と繻珍の昼夜帯といふ扮装だヨ」*5 と女性の衣装も賛美の対象になる。これらの共通点は、明治維新以降の近代的な文物ではなく、近世の伝統を受け継いだ文物だということである。たしかに城下町名古屋ではとくに江戸中期の徳川宗春の時代に三都に対抗するような独自の文化が形成された。鏡花は、その名残への親近感を感じ、それらの文化の名残がある大須・前津等に名古屋駅と並ぶ「紅雪録」の舞台を設定したという側面も存在するのではなかろうか。

たしかに鏡花には、地域性を丁寧に汲み上げ、それによって自身の中央性を相対化しつつ物語を作り上げていくという視点はなかった。その意味で、日本の国民国家形成期の中央—地方という基本的な問題は、ほとんど鏡花の認識からすり抜けている。しかし、結果としていえば、この「紅雪録」は、日本近代における地方のあり方、とりわけその近代化への批判となっているということは見ておかななくてはならない。

註

*1 夏目漱石「行人」(『漱石全集』第8巻、岩波書店、1994年) 211～212頁。なお、1908(明治41)年3月27日、名古屋を訪れた志賀直哉は、日記に「熱田へ七時頃着、神宮を見て、名古屋市をぬける イヤな所だつた、」(『志賀直哉全集』第11巻、岩波書店、1999年、226頁) という感想を書きつけている。

*2 前掲「名古屋見物 附り伊勢まゐり」164頁。念のために読み方をより実際に近いかたちで書くと次のようになる。カッコ内は意味である。「おいてちょうでやーも(やめてください)」「すきゃたらん(好きではない)」「おきやーせ(やめておきなさい)」「ちよつとも(少しも)」「だちかんと(だめだ、いけない)」「ぐざるぞいも(ぐずぐずいう)」「いいきやーも(いいですか)」「そうきや(そうですか)」「なんでやーも(なんですか)」「いきやーすか(いきますか)」「おきやーすか(やめますか)」「どうしゃーす(どうしますか)」「(芥川律治『なごやことば 文化財叢書』〈名古屋市文化

財調査保存委員会、1956年)、『名古屋方言の研究』(泰文堂、1971年)を参考にした)

*3 同前 165 頁。

*4 同前 168 頁。

*5 同前 167 頁。

付記：

本稿は、もともと「文学をととして日本史に親しむ会」(愛知県岩倉市)の例会で2010年4月～12月にかけて講義したものを大幅に改筆したものである。筆者の思い付き程度の講義を30年来のおつきあいということで寛大に聴いてくださった会員の皆様に心から感謝いたします。

(原稿受理年月日 2012年12月5日)